

持続型生存基盤研究のためのグローバル研究プラットフォーム構築
研究成果発表および資料収集に関する出張報告

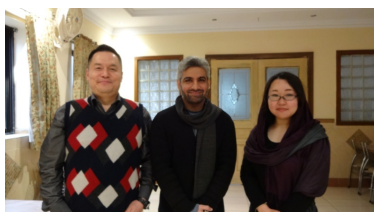
1. 出張者 山根聡
2. 出張期間 平成2月14日～24日(11日間)
3. 出張先 ガヴァメント・カレッジ大学(パキスタン・ラーホール)
パンジャーブ大学(パキスタン・ラーホール)
バハーウッドイー・ザカリヤ大学(パキスタン・ムルターン)
チュラロンコーン大学(タイ・バンコク)

4. 出張について

今次出張では、持続型生存基盤研究のためのグローバル研究プラットフォーム構築を目的とし、本研究課題において派遣中の須永恵美子(大阪大学)とともに、パキスタンの主要な研究機関との連携において、これまでの研究内容を発表するために、国際セミナーを開催したほか、研究課題に関わる資料収集に努めた。

5. 出張内容

2月14日に関西空港を出発し、同夜ラーホール空港に到着し、翌日15日には、ラーホール経営大学(LUMS)のアウラングゼーブ・ハニーフ講師と滞在先ホテルにて面会した。同講師は、2013年11月にLUMSにて開催した国際イスラーム会議において、須永恵美子氏および筆者が研究発表を行った際のカウンターパートであり、同氏は今年3月に京都大学で研究発表を行うため、事前の協議を行った。



筆者、アウラングゼーブ講師、須永氏



ザーヒド博士とともに

また16日にはパンジャーブ大学のザーヒド・ムニール・アーミル教授と、滞在先ホテルおよび同教授自宅で面会し、日本とパキスタンの研究交流に関し意見交換をおこなった。

また、パキスタン最大の書店サンゲミール出版社社宅を訪問した。当日は同出版社創立者の死去後40日目の弔事であったが、この際、パキスタンの著名な文人や研究者が一堂に会しており、思わぬ再会となった。

17日は、サンゲミール出版社を訪問し、ここでウルドゥー語書籍を購入後、ガヴァメント・カレッジ大学を訪問した。ここは須永氏が本プロジェクトによって研究調査活動を行っている研究機関である。まず総長およびハルーン・カーディル・ウルドゥー文学研究科長を表敬訪問したうえで、総長主催の昼食会に参加し、大学内の研究者との交流を持った。

今年度中に、同大学の研究者 2 名を大阪大学に招へいし、セミナーを開催する予定であるところ、共同研究に関する打ち合わせを行った。さらに、パンジャブ大学オリエンタル・カレッジを訪問し、ハージャ・ザカリヤー元ウルドゥー文学研究科長、イクラーム・チュグターイー元教授等との面会を果たした。チュグターイー博士からは、貴重な書籍の寄贈を受けた。



ガヴァメント・カレッジ大学総長らと共に



ガヴァメント・カレッジ総長や研究者とともに

2月18日にはラーホールを出発し、陸路でムルターンへ向かった。所要時間は5時間である。この際、アヌワール・アフマド元大阪大学外国人招へい教員と合流した。アヌワール博士は前パキスタン国立国語アカデミー会長を歴任したパキスタンにおける国語問題のトップであり、同氏との意見交換は非常に有益であった。また、道中、アヌワール氏の計らいにより、チーチャーワタニー市内の私立学校ユニヴァーシティイー・スクール・システムを訪問し、パキスタンの地方都市における初等および中等教育の実態を観察する機会も得た。公立学校が無償であるのに対し、私立学校は月額1500～2000ルピーの月謝を必要とするが、それでも生徒数は1000名を数え、英語やウルドゥー語を教育言語とした教育が進められている。同日夜にムルターン入りし、夜はバハーウッディーン・ザカリヤー大学ウルドゥー文学研究科長主催の夕食会に出席、大学の研究者らとの意見交換をおこなった。



私立学校訪問



公立学校訪問

翌19日は早朝にムルターンでもっとも歴史のある公立学校ガヴァメント・ムスリム・ハイスクールを訪問した。この学校はパキスタンが独立する前の1941年に設立された学校で、10年生までが就学する。初代校長はヒンドゥーであり、卒業生にはインド独立時にインドに移住し、ノーベル物理学賞を受けた人物など、南アジアで著名な人材を輩出してきたところであった。こうした公立学校の訪問もまた、わが国とパキスタンとの友好関係の将来的発展に貢献するものと感じた。

その後、バハーウッディーン・ザカリヤー大学を訪問し、ウルドゥー文学研究科教員お

よび同研究科学生との懇談会に参加した。ここでは出張者および須永氏がそれぞれの研究内容について報告し、これについて学生との質疑を行った。この模様は翌日の日刊紙に掲載された。同日夜は、バハーウッディーン・ザカリヤー大学総長主催の夕食会に参加、同大学の複数の研究科長らと懇談、本プロジェクトの概要を報告したところ、高い評価を受けた。



BZU 学長および研究者との夕食会後の懇談



BZU におけるセミナー風景



須永氏の発表



筆者の発表

2月20日は本出張の中心となる、「日本におけるパキスタン研究」と題する国際セミナーを、バハーウッディーン・ザカリヤー大学経営学研究科ホールにおいて開催した。須永氏、筆者のほか、日本からは黒崎卓・一橋大学教授、小田尚也・立命館大学教授、井上あえか・就実大学教授、村山和之・和光大学講師がそれぞれにパキスタンに関する研究報告を行った。内容は、須永氏がクルアーン注釈書の言語調査に関する先行研究に基づく、南アジアにおけるウルドゥー語の宗教的アイデンティティに関する報告を行い、筆者が19世紀末から20世紀初めにかけて出版されたウルドゥー語文献に見られる食文化の語彙の分析によるウルドゥー語の特徴に関する報告を行った。他にも、パキスタンの政治分析や2013年のパキスタン総選挙の投票行動に関する分析、パキスタン農村部における出稼ぎの実態調査、バローチスターン沿岸部に位置する島に見られる信仰形態などが報告された。セミナーには同大学総長のほか、同大学の研究者、バハーワルプール・イスラーム大学教授のナジーブ・ジャマール教授等の参加をいただき、共同研究の成果として大きな成果となった。さらに、栗屋利江・東京外国語大学教授および小磯千尋・大阪大学講師の他、現在パキスタンに留学中の学生(大阪大学、東京外国語大学)も参加し、聴衆は100名を超えた。セミナーの様子は現地テレビや新聞に報じられるなど、本研究交流にとって大きな広報効果もあった。同日夜は、バハーウッディーン・ザカリヤー大学ウルドゥー文学研究科主催の夕食会に招待された。



セミナー後の夕食会の風景



セミナーに関する新聞記事



ウルドゥー文学研究科での懇話会の新聞記事

パキスタン最終日の2月21日は、朝8時にムルターンを出発し、陸路ラーホールに向かった。ここで昼食時にムハンマド・カームラン・パンジャブ大学オリエンタル・カレッジ・ウルドゥー文学研究科長との面会を果たすことができた。同大学は筆者の出身大学で、カームラン氏は筆者の大学院時代の1年後輩にあたる。今後の研究交流について意見交換をおこなうことができた。夕方にはさらに書籍等資料収集を行い、タバッサム・カーシュミーリー・ガヴァメント・カレッジ大学ウルドゥー文学研究科教授のご自宅を訪問、出発直前まで面会を果たすことができた。同博士からも研究論文数点の抜き刷りをいただくことができた。

21日深夜にラーホールを発ち、翌22日早朝にバンコクに到着した。ここでは、午後からスラット・ホラチャイクル・チュラロンコーン大学南アジア研究所長に面会し、現在同氏と進めている研究交流について話し合うことができた。また、23日にはチュラロンコーン大学出版を訪問、スラット氏が紹介してくれた文献資料を購入することができた。こうして、24日午前バンコク空港を発ち、同日夕方、関西空港に戻った。

6. 目的の達成度や反省点

今次出張では、南アジアにおける主要研究機関との連携を目的に、ラーホール市内のガヴァメント・カレッジ大学、パンジャブ大学等のほか、ムルターン市内のバハーウッドイー・ザカリヤー大学を訪問したほか、ムルターン市内および近郊の初等、中等教育機関も訪問し、パキスタンにおける教育・研究の実態についても調査した。また、空いた時間に研究者との面会を設けるなど、できる限り多くの研究者と交流し、これまでの研究成

果を報告しあうとともに、今後の共同研究の可能性について前向きな合意を得たことは、大きな成果となった。特に、バハーウッディーン・ザカリヤー大学で実施したセミナーは日本とパキスタンの研究者の交流が結実したものであった。

反省すべき点は、面会時間の設定が、直前になって変更することがあった点である。出張前に計画していた面会予定の研究者全員と会うことができ、それ以上の研究者とも会えたことは良かったものの、短期間で多くの研究者と面会するにあたっては、やはり時間配分が厳しいものとならざるを得なかった。

こうした反省点は時間的制約にかかわるもので、全体としては、非常に有意義なものとなった。